研究班番号【49】

現代人の失われた感性～「醒酔笑」から探る

国語班：寺田　耕平、和田　力丸

要約

M-1グランプリは回を重ねる度に、ネタの構成やスピード感などに違いが見受けられた為、江戸時代と現代の笑いにおいても笑いの違いがあるかもしれないと考え、醒睡笑を用いて研究を進め、更にそれらを元に現代で失われた感性についても探ることにした。江戸時代の笑いを攻撃・感心・共感の三つに分類することができ、現代ではそれらに加えて、「ツッコミ」と言う新しい笑いを融合させたハイブリッドな笑いになっている為、笑いは時代と共に常に進化を続けてくれると期待している。

1. はじめに

M-1グランプリの歴史動画を見ていたとき、第一回と最新回ではネタの構成やスピード感や喋り方などに違いがあることに気づいた。M-1グランプリ以外の漫才の歴史動画を見ていても、同様に違いがある事が確認できた。現代の笑いの中でさえ、笑いに違いが見受けられていた為、昔の笑いと現代の笑いにも違いが見受けられると考えた。江戸時代では当時鎖国をしており、他の時代と比べて外国の笑いの影響を受けずに日本の笑いの文化があらわれていると考えた為、昔の江戸時代と現代の笑いでは何がどう違うのかを調べることにした。更に、江戸時代から現代にかけて笑いが変化していく中で、昔には存在しているが、現在には存在していない感性があるかもしれないと考え、江戸時代の笑いと現代の笑いを比較する中で、現代で失われた感性についても探すことにした。またここでの笑いの定義として、娯楽として人々が自ら求めるお笑いを笑いと定義する。

2. 研究手法

1、醒睡笑（全42項・1038話）を用いて、笑いの種類を分類する。
2、現代の価値観から、現代の笑い（落語、コント、漫才etc）と比較する。
3、現代で失われた感性について考察する。

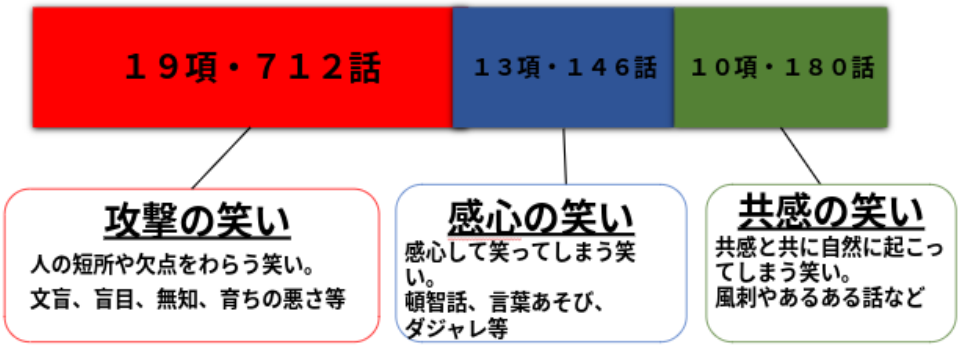
3. 結果

≪調査≫

笑いの種類を3種類に分類した。醒睡笑全42項・1038話の内、19項・712話が人の短所や欠点や失敗（理解が遅い者、文盲、盲目、無知、育ちの悪さ、失態を取り繕おうと慌てる者など）を笑う話だった。その他13項・146話が頓智話や言葉遊び、10項・180話が風刺や「あるある話」という分類になった。

4. 考察

≪調査≫より醒睡笑の笑いは3種類に分けられると考える。1つ目は人の短所や欠点を笑う「攻撃の笑い」。2つ目はダジャレや頓智話などに感心させられる「感心の笑い」。3つ目はよくある状況を正確に描写され笑ってしまう「共感の笑い」である。これらの笑いは現代でも共通して存在していると言えるだろう。



また攻撃の笑いが多い要因として、醒睡笑が本という媒体であることが影響していると考える。本は黙って読むことが多く、音に起因する笑いは伝わり方に限界があるため、攻撃の笑いという読むだけでわかりやすい笑いが多く採用されたと考えられる。また、江戸と現代では笑いに求める倫理観に差があり、現代では到底受け入れがたい攻撃的な笑いが多数収録されていた。また、現代ではこれらの笑いに分類し切ることができない新たな笑い（裏切り、不条理、メタなど）が生まれていると考える。

そして、醒睡笑と現代の笑いの中には一つ大きな違いがある。それは、ツッコミの存在だと考える。醒睡笑では笑話をそのまま読者が笑う構造であり、一方で現代の笑いではボケにツッコミが入るという1セットを観客が笑う構造になっている。現代の笑いの代表例である落語、コント、漫才などでツッコミが欠かされたことはなく、無い場合は上に挙げた新たな笑いである裏切りを生み出すためにあえてやられていない場合に限られる。醒睡笑と現代の笑い、ツッコミというワンクッションが入る現代の笑いのほうが明らかに笑いやすく、これは正統な進化であると言える。

また、現代の笑いは上に挙げた3種類の笑いやそれらに分類できない新しい笑いとを組み合わせ、融合させたハイブリッドな笑いが主流であると言える。それは、昔と違い芸人が一般的な職業となり、他との差別化やより多くの人に知って貰う必要が出たために、オリジナリティを出す過程での結果だと考える。

ここで代表的なお笑いの形態の3つである落語、コント、漫才を見ていく。漫才は典型的なボケとツッコミの形態である。ボケで笑わせ、ツッコミでさらに笑わせるという流れはよく見られる。これは醒睡笑にツッコミという進化が起こり、それをさらに現代に伝わりやすいようにチューニングした、一番進化した形態と言えるだろう。また、落語とコントには共通点がある。それはどちらも演者が劇の中の役をこなすという点だ。その役の中にはツッコミとボケが存在しており、これは、醒睡笑の話の中にツッコミという役割を加え、劇化したものと言えるだろう。そのため漫才より比較的簡単に笑いやすくなっているのではないかと予想する。

5. 結論

江戸時代には「攻撃の笑い」「感心の笑い」「共感の笑い」の3種類があることが分かった。攻撃の笑いの話が一番多く、その理由として醒睡笑が本という媒体であることと、江戸時代は現代より倫理観がゆるく過激な笑いも受け入れられやすかったからと考えられる。また、現代ではそれに加え、更に新たな笑いが生まれている。そして、ツッコミという行為は醒睡笑には見受けられなかったため、これを江戸から現代まででの一番の笑いの変化とした。また、醒睡笑にはあって現代の笑いには無いものは見受けられなかった。現代の笑いのメジャーな形態である漫才、コント、落語にも醒睡笑からの変化と系譜が見受けられ、笑いは進化していることが見受けられた。つまり江戸時代と現代の笑いの中で失われたものはなく、ツッコミという新たな見せ方と笑いの多様な表現方法が発明されたと結論づけた。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

醒睡笑全訳注　安楽庵策伝　（宮尾興男　訳注）